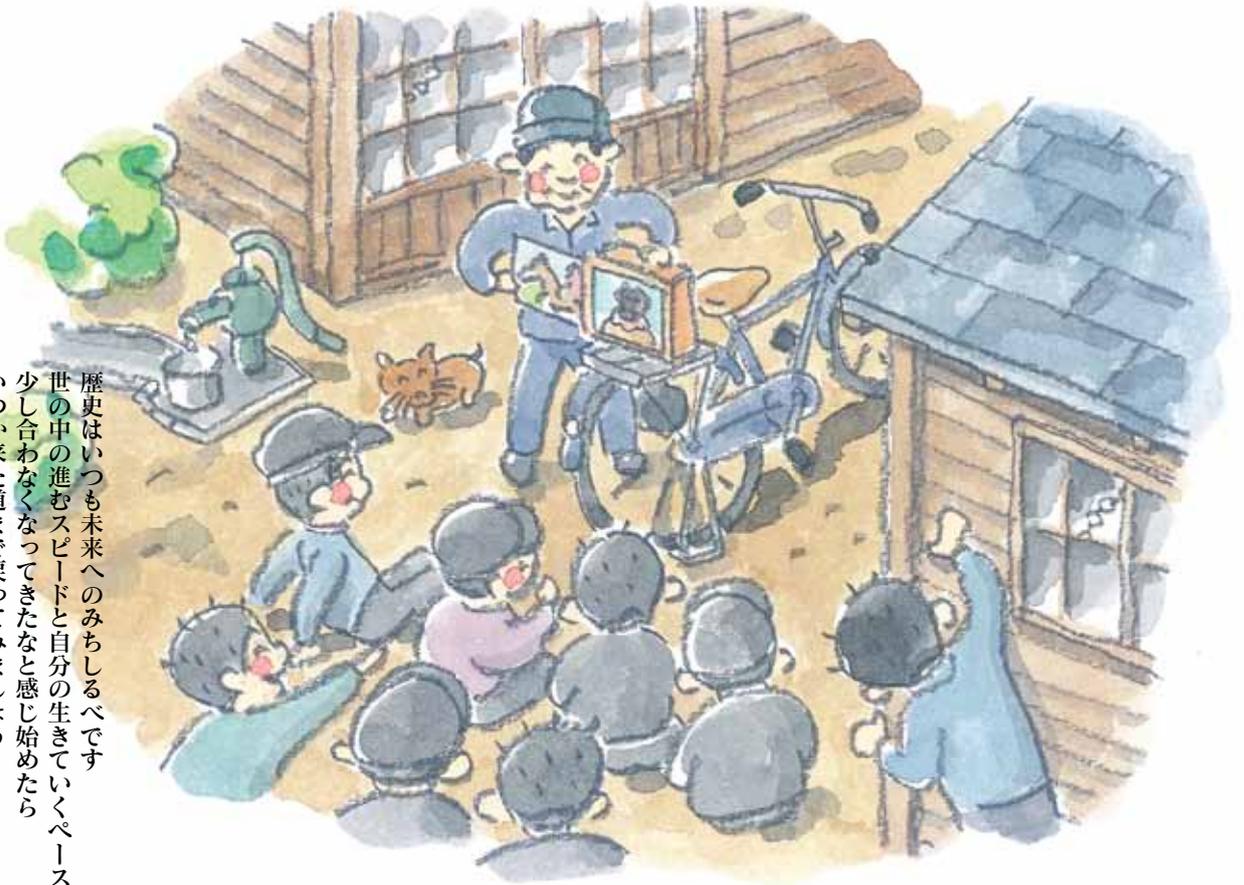


語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう



飴玉一つと無限の想像力。

テレビもなくおもちゃ類も簡単に手に入らなかった時代。五円か十円の飴玉をしゃぶりながらの紙芝居を覚えていた世代は、だいぶ年配になりました。ラジオと漫画の中間といいたいでしょうか、無限の想像力を働かせて見入っていましたね。自転車で作ってくるおじさんはなぜか登山帽に腰手ぬぐい。集合の合図は拍子木でしたか、太鼓でしたか。NPO法人として活動している現代の紙芝居屋さんには、健康でボランティア精神のあることが必要と聞きました。始めたらなかなかやめられないのは子供たちの目の輝きと、いつも最後が「続きはまた来週で終わるからとか。



- ・時の街角／旧本庄鉄工場——2
- ・マチの博物館／りとるわん——3
- ・川筋を行く／創成川(一)——4
- ・来た道行く道／ひまわり洋服直しセンター——5
- ・あるはむレトロポリス／サーカス・見世物——6
- ・道具で道草30年——7
- ・時計のある風景——8

二〇二一年春(年四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1597

編集：ひと街ごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産協会館四階
(編)編集工房海内 TEL(011)633-1651



時の街角

北海道開拓の村から

「村の鍛冶屋」という文部省唱歌がありました。近在の農家の農具や山林用具を作るリズムカルな音が地方の平和な暮らしを象徴していたものです。そんな鍛冶屋が姿を消したのはいつごろでしょうか。石狩市で昭和五十六年まで営業していた鉄工所です。

河口の町の鍛冶屋、漁具や農具を製造。

旧本庄鉄工場 明治三十年（一八九七）建築

昭和三十年代までは札幌市内にもあった鍛冶屋。さっぽろ文庫の記述を借りると「さまざまな農具や山林機具などの生産用の道具から、家庭で使われるマサカリなどまですべて

手作業で製造し（中略）地域の生産活動に結びつく仕事をしていた（27「職人物語」）。今回の本庄鉄工場は、石狩川の河口に拓けた石狩町の市街地にあつて、春先には農具を、夏から秋にかけてはサケ刺網漁に使う錨や、和船の船釘を製造していたところでした。本庄鉄工場の歴史をざっとたどってみますと、江差町で装飾鍛冶を営んでいた創業者が死亡したため、後に二代目となる幼い息子が明治二十八年



仕事場の裏側には簡素な居室。炬を切っている

（二八九五）、姉とともに石狩に移住。十一歳の時に町の鍛冶屋に弟子入りし、さらに岩見沢市の農機具専門の鍛冶屋で修行を重ねました。そして大正四年（一九一五）に石狩町で独立し、同十四年に仕事場を兼ねた住居として買った住居として買ったのがこの建造物。建てられたのは明治三十年ころと推定されています。間口五・五間、奥行九・五間の木造平

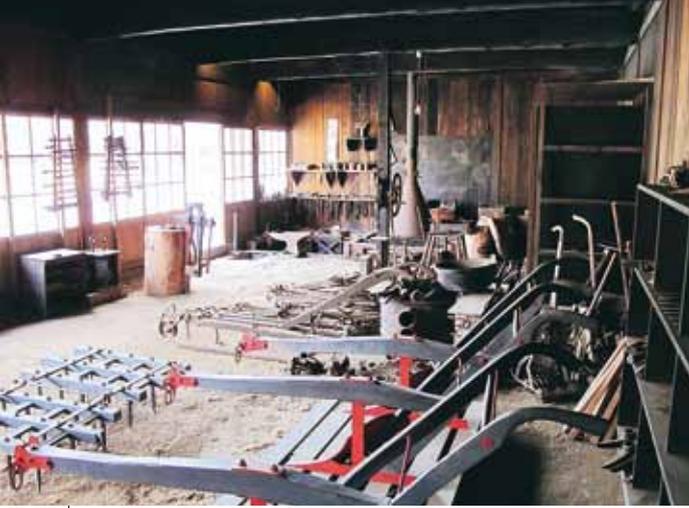
屋建。切妻平入りで屋根は葺葺、外壁は西洋下見板張りとなっており、建物の前側が工場、その奥に住居部分があります。鉄を打つ様々な道具や製品が雑然と並ぶ工場ですが、鍛冶屋の作業とはどんなだったか、ちょっと思い出してみましようか。それは、製造する機具の大きさに切斷した地金や、鋼の材料を火床の中に入れて加熱し、取り出して金敷の上でたたいて伸ばす作業の繰り返しでした。

耳に残るのは、火床の前にいる人と、その助手に当たる人が代わる代わるハンマーと槌を打っていくあの「ドンテンカン」の音。やがて形が整ったら油や水の桶に入れて熱処理し、焼き入れを行います。

そんな仕事の様子を歌にした文部省唱歌「村の鍛冶屋」の一番はこうです——しばしも休まずうち打つ響き／飛び散る火花よ、はしる湯玉／ふいこの風さえ息をもつかず／仕事に精出す村の鍛冶屋。この歌がすべての教科書から消えてしまったのは昭和六十年（一九八五）のことです。



大型の農機具の出し入れにもラクな広い間口が特徴の鉄工場「村の鍛冶屋」とは趣きが異なるかも



近在の農家から製造の注文を受けた農機具が並ぶ広い仕事場。コークスが赤々と燃えていた火床、大木を利用した万力……

※参考文献 北海道開拓の村・開村10周年記念誌

活字離れ、本離れがいわれる近年ですがこんな本のお店があるとほっとします中に入っただけで色がたくさん、心もうきうき子供たちの夢もいっぱい詰まっています

自分が小さい頃にどんな絵本を読んでいたか記憶していますか。自分のことより、わが子に買い与えたり、読み聞かせしたりした本の方をよく覚えていてる親御さんも多いことでしょう。

「ぶつくはうす・りとるわん」の店主の佐々木正博さん(六)が、この絵本の専門店をオープンしたのは平成十年。出版社勤務の間に構想を固めながら、約三千点をそろえて開設に漕ぎ着けて以来、現在はタイトル数だけで七千点という小さくて大きな本屋になりました。

大人も楽しい 夢一杯の 絵本ワールド。

販売スパンはとても長い」とのこと。読んだことのある人も多い『ぐりとぐら』(福音館)について尋ねてみると、「ずっと変わらない人気です」と。最初に出版されたのが昭和四十二年ですから、もはや絵本の古典の部類に入るのかもしれない。佐々木さんも「あの大きなカステ



作者別や出版社別など様々なコーナー分けされた店内。上は今月のおすすめの本コーナー

スタンダードから新刊まで色とりどりの7,000タイトル

子供に夢を―店主の佐々木正博さん
同時に大切なストーリーは、基本的にはあまり変わっておらず、例えば「親子の日常の何気ない会話を動物に置き換えたりしている」そうです。
幼いときに見た絵本の「こまはいつまでも心に残っているもの。とはいえ佐々木さんがちよつと気になるのは、各家庭で絵本にかけるお金。ゲームに比べたらどのくらいでしょうか。「絵本の好きなお母さんなら毎月でも買いますが、そう



る。個性と
いえば個性
ですが」と
いい、かが
くひろし
作の『だる
まさん』シ
リーズを挙
げてくれま
した。絵と

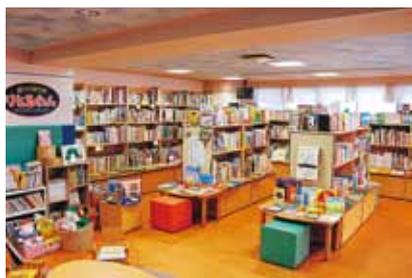
ラの出でくるとこ
ろなどは忘れられ
ませんよね」と目
を細めます。
絵や作者、訳者
などに気を配りな
がら新刊を仕入れ
ていますが、近年の傾向として「絵そのものが漫画的になってきているような気がする。個性と



かわいいういぐるみは子供たちへの気配り



人気のかぐくひろしの本をまとめて



手前で読み聞かせなどのイベントを

ントを探し
にきません
かと呼びか
けています。
日曜日も営
業していま
すし、毎週
木曜は午後
三時から読
み聞かせの
イベントで
す。

後、人の役に立ちたいと読み聞かせを考
えている人たちへのエールでもあります。
こうした佐々木さんの活動を支持し
てくれる友の会会員や固定ファンが札幌市内外に。一地元以外と少ないのは共働きや高齢者が多いせいかな」と、仕事
が休みの日のお母さんには気分転換
に、お年寄りにはお孫さんへのプレゼ

うかどうか(佐々木さん)という
のが現状のようです。
その絵本が好きなお母さんも、
子供のためより自分のため。読み
聞かせのサークルに入って活動し
ている人もいます。佐々木さんが
本業の傍ら読み聞かせに赴くのは本を薦
める一方で、団塊の世代などリタイアした
後、人の役に立ちたいと読み聞かせを考
えている人たちへのエールでもあります。



店構えもメルヘン調で入りやすく

でなけ
れば年
一冊買

創成川



川筋を行く

人と川の
様々な
かわりを
かかわりを
たずねて

鴨々川(つぎやがわ)？

豊平川から取水する上流 京都の風情はもう昔語り。

百九十万大都市のど真ん中にこの春、大きく変身した親水空間が姿を見せる創成川です。その札幌市北部までの流れをたどりませんが、初回に鴨々川とは、そもそも鴨々川ってどこの、そんな疑問から始めていきましょう。

い流れ
に、鴨々川

鴨々川は、都心部か

ら北区茨戸までの創成川(二キロメートル)の流れのうち、旧ロイヤルホテルあたり(中央区南六西二)から上流の二・五キロメートルの呼称です。創成川の源流といえは大きすぎますが、さかのぼれば豊

平川の取水門
に行き当たり
ます。
名もない小
川のような細



豊平川河川敷にある鴨々川の取水口
いわばここから創成川の源流
テニスコート横の小さな橋



堤防をくぐって
ここから市街へ
知らない人が多い



なつたからとい
う説がふさわし
いようです。昭
和三十年代まで

うも北海道的ではあ
りません。諸説がありま

が、札幌の街づくりは京都をモデルにしているので鴨川と付けたという説や、昭和の初めに南一西六に「鴨川」という料亭ができて以来、料筋を乗せた人力車が走るようになつたからという説がふさわしいようです。昭和三十

は、川の水を
利用して反物を洗う
染め物屋や呉服屋が軒
を並べていて風情があり
ました。

中島公園の西端をなぞるよ
うに流れる川は昔と変わるとこ
ろはありませんが、かつては水面
にまで木々の枝が垂れ下がって、
子供たちには秘密の遊び場だった
体育センター横あたり。都市公園の雰囲気



上ノコンサートホールキタラ下ノ渡辺淳一文学館

ような場所もすつかり整備され、
明るい都市公園の一部になってし
まいました。

テニスコート横は子供たちの
夏の水遊び場。コンサートホー
ル・キタラの西側には遊歩道がで

き、渡辺淳一文学館の近代的な建
物もここににあります。昔の面影を
残しているといえは豊平館付近か
ら水天宮横を通って南九条通りに
出るまででしょうか。そこから先
はススキノビルの谷間を縫うよ
うにして創成川にたどり着きます。



キタラ西側に作られた
情緒のある「ホテル水路」
小魚の素早い動きが見える



重要文化財の豊平館
来年度から工事のため閉館



豊平館隣の日本庭園にある茶室「八窓庵」
こちらも国の重要文化財だ

鴨々川にコイの群れが悠々と泳ぐ。南8条橋付近

この間で特に目を引くのは、コ
イの放流施設。約千匹といわれる
色とりどりのニシキゴイが流れに
ゆつたりと群れています。これを
造るにあたっては萩市や津和野町
などを参考に
したそうです
が、どちらも
いわゆる小京
都。あくまで
も鴨々川は京
都流なのです。



右の合流点。南6条橋から北方向を望む
ここから北区茨戸までが創成川になる



鴨々川と創成川の合流点？

来た道、 行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦他薦を
お待ちしております。

レベルの違いはあっても女性なら多少のことはこなす料理や裁縫を、一生の仕事として続けていくのは大変でしょう。それこそ「好きだから」と、半世紀以上も洋裁

に携わっている長尾富美子(七)さんです。

昨年春、惜しまれて長い歴史に終止符を打った円山市場(札幌市中央区)。そこで二十五年間、長尾さんが営ん

でいた「ひまわり洋服直しセンター」もいったん閉店し、市場の東斜め向かいで再開してちょうど一年となりました。

足を悪くして学校も満足に行けなかつた小さい頃から母親に洋裁の手ほどきを受け、足の治療で入院している間に親が



洋裁学校の入学手続きを済ませていたと笑う長尾さん。洋裁一筋の人生がそこで決まりました。仕立て屋勤務などを経て、

円山市場内の先代の店に入るのが三十代半ばです。そのオーナーが家庭の事情で東京へ去るといので後を引き継ぎました。昭和六十年、五十一歳の時、「昔から好きでしたからね」と長尾さんはこともなげです。



どんな注文にも丁寧に応じる長尾さん。固定客も多い

洋服直しといえは
大方は想像の付く、
それほど複雑ではない作業です。男性ならズボンのウエストを詰めたり出したり、上着の肩幅なども同様です。一方、女性のものなら肩パッドを取ったり薄くしたり、サイズ直しもよくある注文。時代を反映してリフォームも年々増えています。衣替えの時期に当たる春と秋が一年中



ひまわり洋服直しセンター
札幌市中央区大通西23丁目1-14
TEL(011)611-1951

で一番忙しいというだけあって、話を聞いても



ひっきりなしにお客さんがきます。その一人ひとりに長尾さんが丁寧に対応。いかにもベテランらしくやわらかな言葉遣いに、お客さんもきちんと仕事をやってくれるという安心感を持っている様子がわかります。「注文どおりに仕上がって喜

ちらで注文仕上げというのもしすが若い人。

このほかペットの洋服や縫いぐるみを作ったり、入園・入学グッズを作ったりと様々な注文に応じています。スタッフは長尾さんのほかに女性が三人と、在宅で紳士物を手

直しはおまかせ 「好きだから」と 洋裁一筋に半世紀。

長尾富美子さん——札幌市・ひまわり洋服直しセンター

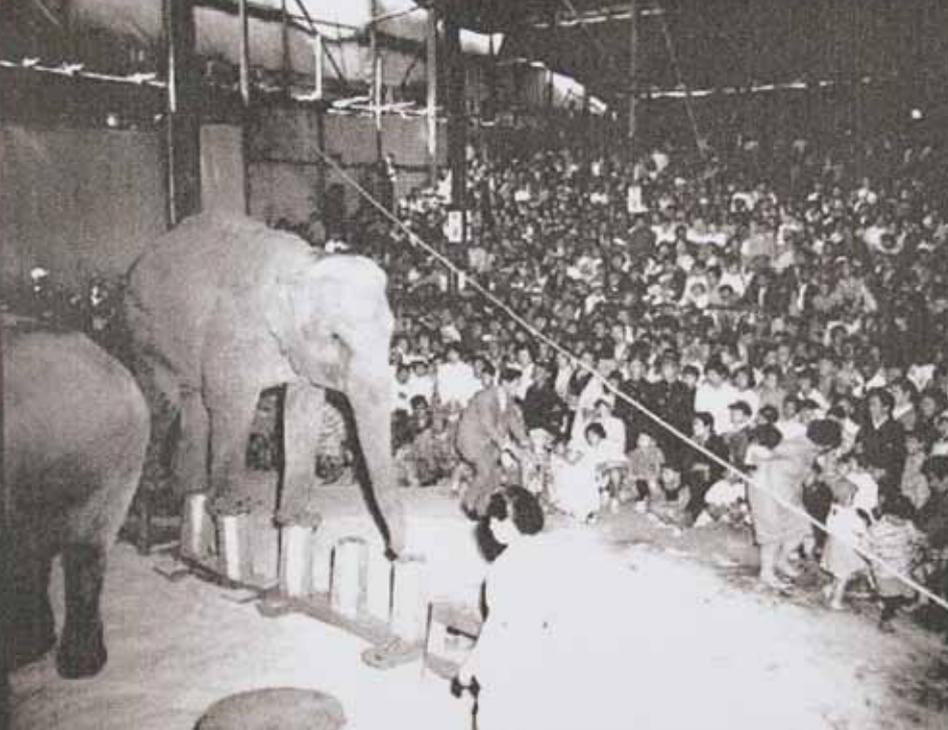


ばれるととてもうれしい」と長尾さんも顔をほころばせません。男性も女性も体型の変化による直しは当然としても、女性

はやはり流行に敏感です。「最近はこちらの丈が短くなっていますから、丈上げの注文が多いですね」と長尾さん。男性は父親から譲ってもらったジャケットの肩幅や袖丈の直しも多いとか。若い独身男性はGパンのウエストや丈の直しなどを持ち込んできておしゃれに積極的ですが、古いものばかりでなく、体型に合わなくても柄やデザインが気に入った新品をこ



長尾さんを中心に通常は4人の女性で切り盛りしている



あるばお レトロポリス

サーカスのメインといえばやはり動物ショー
ゾウやトラの管理・移動には苦勞もあつたはず
(昭和37年6月15日、中央区中島公園)
※写真6枚とも札幌市文化資料室提供

サーカス見世物

満開のサクラの下で春に浮かれた後は祭りの季節。
よさこいソーランまつりにいくらかすんでしまつても
札幌っ子なら札幌まつり、サーカス、見世物——
いや、こちらもすっかり音語りになつてしまいましたね。

札幌まつりの賑わい呼ぶ。

道産子にはおなじみだった人気サーカス団が昨年十月、姿を消しました。昭和十七年(一九四二)に創業し、全国にその名を知られた「キグレサーカス」。札幌市中央区に事務所を置いていたとは、案外知られていません。それだけに道内での公演も多く、各地にいるファンが来るのを待ちこがれていたのです。

札幌の街に初夏の訪れを告げる札幌まつりに見世物小屋が出たのはかなり古く、明治二十五年(一八九二)のこと。南二東三の現在の頓宮付近

でした。その後、見世物小屋やサーカスは南一西一の創成川沿いに移り、祭りの賑わいの中心に。そして昭和三十四年(一九五九)、サーカス小屋から火が出て、約五十人の重軽傷者のほかライオンやトラなどが焼け死ぬという大惨事となり、場所も狭いことから中島公園に会場が移りました(中央区「歴史の散歩道」)。

サーカスの出し物。どんなものがあつたか覚えていますか。鉄製の籠の中を走り回るオートバイの曲芸、空中ブランコ、球乗り、ゾウやライオンなどの動物ショー。

一方の見世物小屋にはお化け屋敷を初めとしてヘビや犬の曲芸、表のまがまがしい看板や呼び込みとはまったく違う出し物なんてことも。つまらないショーでも誰も文句は言わず、列を作つたものでした。



オートバイの曲芸やお化け屋敷の前の人だかり
(昭和42年6月15日、同上)



札幌まつりの広場として定着した中島公園
(左・平成6年、右・昭和59年、いずれも6月15日)



サーカスや見世物小屋があれば人を引きつけたのは、そこに文明の発達とは無縁の、生の人間の営みがあつたからでしょう。希薄になつた人のおい、声、動き——現代人の心の奥底に眠っているものを呼びさましてくれるからです。祭りの広場からテントやのぼりが消えても、露店の賑わいはまだまだ健在です。

道具で

道草30年

若かりし頃は多彩な趣味の持ち主でもあった筆者
カヌーに挑んだのは愛好者もまだ数少ない二十年以上前だ
外国製のもを五十万円ほどで手に入れていざ支笏湖へ

坂一敬

趣味は？と聞かれても、今は言葉に詰まるけれど、一昔前なら「夏はカヌー、冬は山スキー、そしてカメラと写真の現像かな」と答えた頃もあった。

その四十代のある日、友人からカヌーの講習会があるからいっしょに行こうと誘いがあり、何もいらぬ身一つ、朝誘いに行くから、との連絡で、彼の車で支笏湖の集合場所へ出向いた。

そこには舟らしきものは何もなくて、いったいどんな講習会なのだろうと思っていたら、時間になり講師の人が話しはじめた。

集まった人はみな四十以上の中年で若者は一人もいない。彼がそばに積んであった荷物のチャックを開くと、中に分解されたカヌーの骨組みが入っており、彼はそれをあつという間に組み立て、続いてカバーを張るとたちまちカヌー一艘の出来上がり。

その間、十五分くらい。彼はカヌーの入ったケースを我々



支笏湖にて。ライフジャケットをつけているのでまだ入門して間もない頃だ(下も)

の前に置き、やつてみると言う。彼の指導の下、見よう見真似で、彼のように素早くはできなかったけれど、それでも小一時間ぐらいいで人数分の

今はガレージで眠る 我がカヌーよ……。

カヌーが湖岸にずらりと並んだ。昼食のあと、彼が權(か)これをパドルと呼ぶのもこの時知ったの使い方を見せてくれた。カヌーはとて軽く、一人で持てるぐらいい。パドルも公園のボートの漕ぎ方も楽。全くの初心者でも簡単に進む。湖の岸よりちよつと

離れたところに赤い旗が立っており、ここまでは背が立つので、もし水に落ちたら慌てず立ちあがればよいとのこと。

カヌーは水面を楽にスイスイと進むし、風が肌にあたっても心地よい。すっかり虜になってしまった。最後に彼を閉んでミーティング。

曰く「カヌーは楽しい。日本中に普及したい。しかし、まだ日本製はなく、輸入している状態なのでとても高額。一式買えば車の半分弱(新車一台百二十万の頃)。とても若者には買える値段ではない。かといって老人ではカヌーを持ち運びできない。そこであなたの方のような、物好きな中年に的を絞った」と言う。

帰りには伊藤温泉につかりながら、こりゃ一艘手に入れようと語り合った。店に行き、舵のついた海にも乗らせるシーカヤックというのを買った。店の人が、これなら国後まで行けますというやつ。底が平らでスピードは出ないけれど、まずひっくり返ることのない舟。

パドルはイタリア製で二つに分けるやつ。(たまたま在庫がこれしかなかった)

それからというもの、休みの日は朝からカヌーの日々。初めのうちはライフジャケットをしていたのだが、これをつけると肌に風を受けて水面を走るといふ快感が全くそがれてしまふので、つけないことにした。(当時のライフジャケットは現在のものに比べると非常にかさばる不細工な代物だった)

それにライフジャケットといえど、私の持っているもので浮力は十時間ぐらいい。支笏湖は水温が低く、十分で心臓マヒ。沈めば木が下にはえているので、ひっかかって、まず浮かんでこない由。上等じゃんというわけ。

休みの日しか乗れないので、少々嵐の日でも舟を出した。波がわつとかぶさつてきて舟は水面の下を走る感じ。しかし、スカートでカバーしているのが水の中に入ることはない。それがまた楽しかった。

それと道がなければ水辺には降りられない。しかし水面伝いならどんなところでも行ける。道は関係ない。中小の砂浜がいたるところにあり、カヌーでしか行けないプライベート



レトロスペース坂会館 館長(坂栄養食品開発部長)

ビーチ。それは海も同じこと。生まれたままの姿のペアを時たま見かけた。その時はパドルをあげてエールを送った。相手もパドルで答えてくれた。知らなくても仲間だ。

やがてカヌーが普及し、人口が増えてくると、私のような乗り方をする人間は肩身が狭くなってきた。ライフジャケットもつけずカヌーを出すのは自殺行為だという。何をおせっかいな。本場の北や南の人はそんなものつけてはいないと思っただけれど、ガキン子と争っても仕方がない。それ以来、我がカヌーはガレージでほこりをかぶっている。

でも、まだ若さの残っている時にカヌーを知って、本当によかったと今でも思っている。

月日は百代の 過客にして――。

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。

写真俳句というのが静かな人気と聞きま
す。お気に入りの一枚の写真に自作の俳句
を組み合わせたものです。駅舎の改修工事
が進んでいる小樽駅ですが、こんなホーム
も、新幹線がこなくてもいずれなくなりま
す。そこでふと写真俳句風に添えたくなっ

た一文が「月日は百代の過客にして、行き
かふ年も又旅人也」。言わずと知れた松尾
芭蕉の『奥の細道』の冒頭部です。秒針を
刻むように、この場所もまた幾多の人が乗
り降りしていったことでしょう。それは
様々な年齢の、様々な職業の旅人たちです。



Now Printing

●本づくりのパートナー
(社)印刷紙工

居間で本づくりセミナーを
自分史など本をつくりたいと考
えている人のために、出前の本づ
くりセミナーを承ります。三人以
上のお集まりで会場をご用意いた
だければ、日時をご相談の上、印
刷担当者や編集者がお伺いした
らいろとアドバイスさせていただきます。ご自宅の居間で結構で
すよ。もちろん無料です。
記念誌は未来への道しるべ
企業や団体の十年を一区切りと
する創立周年、二十周年、三十周
年と歴史を重ねていく度にその歩

質問箱

本づくりの「?」にお答えします。
お気軽に質問をお寄せください。

Q 機械オンチというわけでも
ありませんが、年賀状な
どもっぱら手書き。でも周
りはパソコンを使っている人が多く
なり、私もそろそろと思っています。
自分史を作るに当たっての、パソコン
の効用とはどんなものでしょうか。

パソコンは強い味方

A 文章を書くウエイトが大
きな自分史です。それには
まずパソコンのワープロ機
能が大きな威力を発揮します。
原稿を書くときに文章を削除した
り追加したり、書き直したりという
作業は数知れません。これを手書き
でやるとなると昔の文豪の原稿のよ

うに真っ黒に。そのうえから清書
では大変な手間です。その点、ワー
プロは添削自由、機械がやってくれ
ますから書きあがったものがそのま
ま「決定稿」となります。

印刷会社もCDなどで受け取った
原稿を変換するだけですから、ゲラ
も早く上がりますし、校正も多少の
文章の修正で済むことが多いでしょ
う。ごく少数にして安く上げたい
なら、原稿を渡してそのまま印刷、
製本に入るということも可能です。

もう一つ、パソコンの大きな機能
は資料探し。例えば以前に住んで
いた地域の状況を見たり、母校はど
うなっているのか見るのに、インター
ネットで簡単にアクセスできるとい
うことです。資料そのものでなくて
も欲しい資料のあるところなんて
いうのも探すことができるでしょう。
ぜひ挑戦してみてください。

みを記録しておかなければ資料が
散逸、功績のあった人も物故して
いきます。未来への道しるべ、歴
史はきちんとまとめおきたいも
のです。企画、編集、印刷、どの
段階からでもご用命を承っており
ます。
小紙を無料で差し上げています
慌しい時の流れに、ほっと一息
つける話題を提供していきたいと
願っている小紙。ご希望の方には
無料で定期的にお送りしてござい
ます。印刷紙工までお申し込みくだ
さい。